



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドイツ11月革命とヒルファディングの社会化論 (1)
Author(s)	上条, 勇
Citation	北海道大學 經濟學研究, 29(3), 279-311
Issue Date	1979-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31467
Type	departmental bulletin paper
File Information	29(3)_P279-311.pdf



ドイツ 11 月革命と ヒルファ ディングの社会化論 (1)

上 条 勇

はじめに

序章 ヒルファディングのロシア革命観

I 社会化の取組 (以上 本号)

II 社会化の挫折

III 社会化の総括

は じ め に

1918 年 11 月にはじまるドイツ革命において、ヒルファディングは、独立社会民主党 (以下 USPD) 中央 (ベルリン) 機関紙『フライハイト』(Freiheit) の編集長および党の理論的指導者として活躍した。彼は USPD 党大会、労兵協議会大会、労働組合大会、社会化委員会など数多くの重要な会議に参加して、ドイツ革命運動に大きな影響をあたえたのである。ドイツ革命運動におけるこうしたヒルファディングの活動は、『金融資本論』(1910 年) 以後のヒルファディング研究という問題関心からすれば、つぎの二つの点で注目される。

第一に、ヒルファディングがこの時期に打ち出した社会化 (Sozialisierung) 構想は、社会主義にかんする彼の見解をはじめて体系的に示したものであり、彼の社会主義観を知るうえで興味深い。ヒルファディングは、マルクス主義の任務が社会主義の未来構想をたてるのではなく、資本主義社会の発展法則を科学的に究明することにあるといった考えから、それまで社会主義の内容について具体的に触れなかった。ドイツ革命が勃発してはじめて、彼は社会主義建設のための実際的な指針をもとめ、社会化論を展開した

のである。

第二に、第一次大戦中、ヒルファディングは、「組織された資本主義」か民主社会主義か、という二者択一において、戦後の社会発展の道を展望した。ドイツ革命がはじまったとき、彼は社会主義の方に歴史の判定がくだされたと考え、社会化運動を積極的に指導していった。しかし、この社会化運動が挫折したとき、彼はふたたび「組織された資本主義」か民主社会主義か、といった二者択一にたちもどり、その後「組織された資本主義」の現実的可能性を考えつつ、戦後の経済再建に協力してゆくことになる。したがって、ヒルファディングの社会化論を考察することは、『金融資本論』から「組織された資本主義」論への彼の理論的展開を明らかにするうえで、欠かすことができない⁽¹⁾。

ヒルファディングの社会化論については、これまですでにいくつかの論稿が発表されている⁽²⁾。しかしそれらはいずれも如上の二つの点について、総合的かつ十分に明らかにしえていないといえる。小稿では、これらの業績を踏まえつつ、まず序章でヒルファディングのロシア革命観を簡単に紹介した後、ドイツ革命期におけるヒルファディングの理論・実践活動の推移を時系列的に追ひ、そして彼の社会化構想の理論的特質にたちいて検討したい。

(1) これについて黒滝正昭氏は、「ヒルファディングの場合、第一次大戦後の『社会化』運動にたいする総括なしに1920年代の『組織された資本主義』論はありえない」とのべている（「ヒルファディング『金融資本論』における『社会化』論」（『研究年報経済学』33（1）1971、96～97ページ）。

(2) たとえば、W. Gottschalch, *Strukturveränderung der Gesellschaft und politisches Handeln in der Lehre von Rudolf Hilferding*, 1962. 5-c, 保住・西尾訳『ヒルファディング—帝国主義とドイツ・マルクス主義—』ミネルヴァ書房, 1973, 第4章Ⅲ。米川紀生「Rudolf Hilferding の社会化論—R. Hilferding 研究（1）—」（『一橋論叢』94（1）1970・7, 『新潟大学経済論集』（9）1971・2, （11）1972・1, （16）1974）、黒滝正昭「ヒルファディングの社会化論—権力問題との関連で—」（上）（下）（『研究年報経済学』35（4）、36（1）、1974）。

序章 ヒルファディングのロシア革命観

1917年3月にロシア革命が勃発したとき、ローザ・ルクセンブルクをはじめ多くの著名な西欧社会主義者たちは、それを好意的に評価しつつ迎えたのであった。後のボリシェヴィキ革命(10月革命)には烈しい敵意をみせたカウツキーでさえ、この2月革命については、革命が維持されるならば、それは全ヨーロッパに新時代を切り拓き、資本主義の全領域で勤労諸階級の政治的力の力強い飛躍をもたらしだそうとのべた。⁽³⁾ 1918年10月末にはじまるオーストリア革命の指導者オットー・バウアーも—彼は第一次大戦中ロシアの戦争捕虜となり、1917年7月捕虜交換のためペテルブルクに滞在したとき、革命の進行を直接目撃した—、「ロシア革命を支持することは、全ヨーロッパのプロレタリアートの死活の利害である」と主張したのである。⁽⁵⁾

しかし他方で、ロシア革命の見とおしについては、カウツキーは、マルクスの唯物史観の公式にのっとり、ロシアの経済的後進性のゆえにロシア革命が民主主義革命にとどまるだろうと指摘した。⁽⁶⁾ バウアーも、ロシア革命に社会主義の実現ではなく民主主義の実現を期待したのである。⁽⁷⁾

したがって、レーニンを中心とするボリシェヴィキの指導のもとに10月革命が生じたとき、それにたいする彼らの反応は程度の差はあれ否定的な性格をもった。周知のように、カウツキーはただちに『民主主義か独裁か』と『プロレタリアートの独裁』の二書を著し、⁽⁸⁾ ボリシェヴィキの路線にきびしい批判をくわえた。彼はその後も一貫してソビエト・ロシアを、敵意に近い感情をもって攻撃しつづけた。彼によれば、ボリシェヴィキの試みは、「がまんのならない妊娠の期間を短縮して早産児をえるという愚劣極まる飛躍」であった。⁽⁹⁾ カウツキーは後に『自伝』のなかで、ロシアのような後進国が社会主義の道程のうえで、西欧の工業国に先行するという信念に反対するのが自分の義務だと当時考えた、とのべている。⁽¹⁰⁾

カウツキーが、以上のごとく、マルクスの唯物史観の公式に反すると思われる、また、民主主義と社会主義を不可分なものだとする自己の社会主義観と

は異質にみえるポリシェヴィズムの出現を峻拒したとすれば、オットー・パウアーの場合はそれとは少し違っていた。パウアーは、1918年3月の論文「ポリシェヴィキと我々」において、ロシアにおける社会主義運動の歴史を概観した後に、ポリシェヴィズムの企ては「きっと失敗するにちがいない」とのべ、カウツキーと同様にロシア革命の見とおしについて否定的にとらえた。しかし他方で彼は、ポリシェヴィキの理論と実践が「ロシアの経済的後進性への社会主義の適応」であり、ポリシェヴィキ革命が歴史的に不可避であったことも認めた。そしてたとえそれが失敗の運命にあるにしろ、西欧プロレタリアートはポリシェヴィキ政権に連帯し支援しなければならないと主張したのである。⁽¹¹⁾その後パウアーは、ロシア革命にかんする本格的な論稿をいくつか書き、ブルジョア革命を完遂してロシアにおける民主主義的社会主義的發展の道を切り開く過渡的局面として、ポリシェヴィキ独裁の歴史的意義を把握したのであった。⁽¹²⁾この問題にかんするパウアーの関心は、一彼は当時「ハンガリー・ポリシェヴィズム」との思想的対決をせまられていたので一「ロシア型」の社会変革と西欧における社会変革を区別し（彼はポリシェヴィズムを特殊ロシア的なもの、いわば「専制的社会主義」ととらえた）、社会主義への道の多様性を指摘することによって、オーストリア革命にポリシェヴィキの方法を無批判的に適用しようとする試みを防ぐことにあったといえよう。

ポリシェヴィキ革命における社会主義の志向は、西欧の社会主義者たちの社会主義理念にたいして、当時かなり異和感を感じさせた。「国際的な発展と農業問題が生んだ結果であるロシア革命を、ブルジョア社会の枠の中で解決することは不可能である」とのべたローザ・ルクセンブルクも、最初、西欧社会主義の伝統的な立場からポリシェヴィキ革命の種々の側面について批判的な見解をのべざるをえなかった。倉田稔氏によれば、1918年9月の手紙においてヒルファディングは、「アジア的マルクス主義[=ポリシェヴィズム]がなんと多くの損害をなし、ひきおこしたのかが、今後盲人にさえ明らかになるでしょう」とカウツキーに書いている。⁽¹⁴⁾すなわち、彼は当時カウツキー

と同様にポリシェヴィキ革命を国際労働運動にとって有害なものととらえたのである。

しかし、ロシア革命とポリシェヴィズムは、戦争に倦み疲れた西欧の労働者階級に大きな影響をあたえた。ポリシェヴィズムはスバルタクスや革命的オプロイテを中心とするドイツ労働運動の左翼の心を急速に捉えた。ドイツ革命が生じたとき、スバルタクスが掲げたスローガンは、ポリシェヴィキがロシア革命で唱えたのと同様に、「すべての権力を協議会^{レニテ}へ」であり、協議会独裁か議会制民主主義か、という政治権力をめぐる問題がドイツ革命の重要な争点となったのである。

ヒルファディングは、USPD 指導部のひとりとして、かかるスバルタクスと対決し、ポリシェヴィズムがドイツ労働運動を捉えるのを阻止しようとした。1918年11月18日付の『フライハイ特』紙上の論説「革命的信頼^{レニテ}」において、ヒルファディングは協議会独裁の問題との関連でロシア革命についてつぎのようにのべている。

ロシア革命が生ずるまで、民主主義の実現が社会主義を達成するうえでの基盤であるということには、少しも疑念がなかった。というのは、マルクスによれば、プロレタリア革命は多数者革命だからである。ところがロシア革命は別の道をたどった。ポリシェヴィキによる憲法制定議会の解散後、民主主義を拒否し、ソビエトのテロ独裁のみが社会主義の実現をもたらすといった理論が生じた。理論やイデオロギーは経済的諸関係から生ずる。如上の見解は、工業プロレタリアートが人口のごく少数をなすにすぎない「ロシア的農業国の経済的後進性」から生じた。「ロシア社会主義」の政治権力にたいしては経済的諸関係の後進性が反乱を起こしており、この反乱から生じた苦境からこうしたテロ独裁の美德が生じたのである。⁽¹⁵⁾

このようにヒルファディングは、ロシア革命におけるソビエト独裁がロシアの経済的後進性から生じたと説明した。そしてロシア的な革命方式が先進的工業国であるドイツには移入されえないとのべたが、これは USPD 指導部の共通した見解を表明したものであったといえよう。彼らは、ドイツの労

働者階級がロシア革命を模倣して暴力主義的な冒険に出ることを危惧した。特殊ロシア型とは区別された、ドイツにふさわしい社会主義への道を呈示すること、これがドイツ革命におけるヒルファディングの任務であった。この論説では、ヒルファディングは以上のことを強調するにとどめ、ロシア革命についてたちいった判断をすることをさしひかえている。

ドイツ革命の初期において、管見のかぎりでは、ロシア革命にかんするヒルファディングの発言はそのほかにほとんど見あたらない。ただ、1918年12月20日の「経済生活の社会化」にかんする報告のなかで、後述のごとく彼は、ソビエト・ロシアにおける労働者統制運動を、労働者が下から個別的に経営を社会化する試みだとみなして、それを否定的に評価した^{*}。また、ロシアでは社会主義の実験が大銀行の社会化から開始されたことを指摘して、当時のドイツでは、それにたいして大銀行の社会化から着手することができないとのべたのであった。⁽¹⁶⁾このように、ヒルファディングは、社会化構想を説くさいに、ロシアの経験を引きあいに出したのである。

^{*} 1921年のある論文のなかで、ヒルファディングはつぎのようにのべている。

「……ロシア革命は、労働者階級がひとたび政治権力を所持したならば、生産過程の主人でありたがることを示した。協議会イデオロギーは、政治的にも経済的にもかつての支配階級のあらゆる職務を引き受けるといった労働者階級の衝動の基礎とな⁽¹⁷⁾っている。しかしながら労働者による生産の引き受けはなお社会主義ではない。」

その後、インターナショナルの再建問題が USPD 内における重大な争点となった1919年後半、ヒルファディングはロシア革命についてよりたちいった評価をくだしている。というのは、コミンテルン加盟問題をめぐって、ロシア革命の評価をはっきりさせることが USPD の死活問題となったからである。ヒルファディングは、農民への土地分配政策と労農同盟の問題などとの関連で、ロシア革命についてつぎのようにのべている。

ロシア革命（2月革命）は、ブルジョア＝農民的革命であったが、ケレンスキー政権下での戦争継続政策による軍隊の崩壊は、ロシアのプロレタリアートにとって、ボリシェヴィキの指導下に政権を獲得し、プロレタリアート

の独裁を樹立することを可能にした。⁽¹⁸⁾ 軍隊が崩壊したとき、多数の農民が軍隊を去って故郷に帰り、土地を所有した。そこでは農民大衆は、獲得した土地を保持することに関心をいだき、その結果、かれらの土地所有を保証するのであればどんな政府でも支持した。ポリシェヴィキによる大土地所有の農民への土地分配政策は、農村のかかる状況に適合したものだ。農業における大経営の優位といった我々の古い観念の放棄は、ロシアでは政治的成果によって償われる。⁽¹⁹⁾ しかし、ロシアに独自なこの政策は西欧にはあてはまらず、我々に無用な犠牲を強いるだけである。というのは、ドイツの農民層は少しも土地飢餓を感じておらず、土地分配政策はいたずらに経済的後退をもたらすにすぎないからである。⁽²⁰⁾ 「それゆえロシアの革命の法則は、西欧の革命に一般的に有効な法則ではない。」⁽²¹⁾

すなわち、ヒルファディングは、農民への土地分配が特殊ロシア的に有効な政策だと考える。というのは、農業国ロシアでは、一方に農民の土地飢餓があり、他方でプロレタリアートはその政権を維持するために農民の支持を必要としたからである。ポリシェヴィキの土地政策と労農同盟論はかかるロシアの特殊事情から生じたのである。ヒルファディングは、それにたいして、ドイツの条件にそくした農業政策としてつぎのような提唱をおこなっている。(1)大土地所有は社会的管理に移す。農民は協同組合に組織するなど一定の農業政策によってプロレタリアートの側に獲得するか中立化する。⁽²²⁾

小経営にたいする大経営の技術的優越性および大土地所有の社会化政策といった観点からポリシェヴィキの農業政策を批判的に評価することは、西欧のマルクス主義者たちのこれまでの通念にそっていた。こうした観点からカウツキーがポリシェヴィキの土地政策をはげしく批判したことは周知のことである。⁽²³⁾ ローザ・ルクセンブルクも、1918年の『ロシア革命論』において、政治的措置としてポリシェヴィキの土地政策の有効性を認めながらも、それが非社会主義的政策であり、農業関係の社会主義的改造にあたって、打ち克ちがたい困難を積みあげるものだとネガティブに評価している。⁽²⁴⁾ オットー・バウアーはそれにたいして少しユニークな見解を示している。彼は、ロシア

におけるブルジョア革命、すなわち封建的農業制度の撤廃とブルジョアの土地所有制度の創造がプロレタリア革命によってのみ成就されえたとのべ、この点で、ポリシェヴィキ革命とその土地政策の歴史的意義なり歴史的必然性なりを認めるのである。すなわち、彼は土地革命をひとつの出発点としてとらえ、結局、都市におけるプロレタリアートの社会主義政権と農村における私的⁽²⁵⁾所有制度との対立・相克関係がロシアの将来的発展を方向づけると予見している。

このように、ローザ・ルクセンブルクやオットー・バウアーは、ロシアにおける社会主義的発展が特殊ロシア的な農業関係から生ずる重大な諸困難に当面するだろうと予測したが、この点にかんするヒルファディングの言及はない。彼はむしろ、コミンテルン加盟問題をめぐる論争のなかで、ロシアと西欧における社会変革の歴史的経済的条件の相違を強調する一方で、ロシアにおける社会主義の見とおしについて、はっきりと否定的な見解をも示したのである。これを、1919年11月30日からライプツヒヒで開かれた USPD 臨時党大会での彼の報告にそってのべると、ヒルファディングはまず、ロシア革命が偉大な歴史的事件、プロレタリアートの歴史的闘争のひとつであり、われわれはロシアにたいするあらゆる攻撃をヨーロッパの社会主義革命にたいする攻撃と受けとめ、全力をつくしてロシアへの侵略政策に反対せねばならないとことわっている。しかし、彼はつづけてつぎのような指摘もおこなうのである。

だが、他方で、我々は冷静にロシアの状況を観察するならば、つぎのことも明らかにしなければならない。すなわち、「ロシアの経済的諸条件が社会主義的独裁にとって少なくともひとつの大きな障害をなしているために、この状況はいちじるしく困難になっている……唯物史観の強制、あるいは別の表現を使えば、経済的諸関係による規定からいかなる政治も永久にはまぬがれえず、そして我々は、暴力の役割が経済にたいしてまったく制限されたものであることをマルクスから学んだ。このことをもちろんポリシェヴィキも知っており、だからこそその希望は世界革命への期待にあった。というの

は、ひとつの社会主義ヨーロッパ内で、後進諸国における社会主義も、国家権力をそのために働かせるならば、当然にも比較的容易に実現されるからである。」

しかし、世界革命はボリシェヴィキの期待したとおりにはならず、このことはボリシェヴィキの立場を非常に困難にし、ロシアにおいて一定の後退にみちびいた。すなわち、資本主義のかつての諸形態、ことに農村工業、農民的家内工業の拡大、工場内での経済的協議会制度の後退、ブルジョア諸層とくに高度の熟練労働者、技術者、知識人への譲歩にいたった。ボリシェヴィキの希望は政治的にはなお世界革命にあり、世界革命が生じなければ、彼らは没落する。「彼らは絶望的状态にあり、世界革命を起こさなければならぬ⁽²⁶⁾いか、あるいは没落のまえにあると感じている」。

ヒルファディングは、このように、唯物史観の公式にのっとり、当時のロシアには社会主義を実現するにあたっての経済的諸条件が欠けており、ロシアにおいて社会主義が可能だとすれば、世界革命の一環としてのみであるとのべた。^{*}

* ① 1919年9月に開催された USPD ベルリン地区組織の総会での報告において、ヒルファディングはつぎのようにも述べている。すなわち、「経済的諸困難はボリシェヴィキの支配をくつがえす。経済は内部からボリシェヴィキの支配を変え、それを社会主義とは異なる支配に取りかえる⁽²⁷⁾」、と。

② 1919年9月にベルリンで開催された USPD 全国大会での報告において、ヒルファディングはつぎのような指摘をおこなっている。

「東方においてあらゆる革命の経済的諸条件は、革命の発展にたいしてははじめから懸念を呼び起こさねばならなかった。政治権力の所有と保持は経済の後進性を和らげることができるが、それを克服しようかどうかは非常に疑問だ……我国における(労働者階級の一引用者)政治権力の獲得は、もちろんロシアの同志に負担の非常な軽減をもたらすだろう。しかし精神的諸手段でもってしてはロシア革命を救うことができない⁽²⁸⁾」。

ロシアにおける社会主義の勝利が西欧革命によって保障されるという見解じたいは、マルクス主義の通説的な考えだったのであり、レーニンらボリシェヴィキの著名な指導者やローザ・ルクセンブルクなども終始主張してい

た。そのさい彼らは、帝国主義戦争の結果として世界史の急激な変革過程が生ずると想定していた。オットー・バウアーは、この世界革命がボリシェヴィキの考える以上に長期にわたる過程であり、ボリシェヴィキの独裁政権は西欧を中心としておこなわれる世界革命のなかでの一エピソードにすぎないとのべた。⁽²⁹⁾ ヒルファディングもバウアーと似たような考えから、ボリシェヴィキによる世界革命の提唱が非現実的であると指摘した。彼によれば、社会主義は資本主義の高度に発達した西欧から漸次的に生ずるのであり、国際社会主義の運命は戦勝国とくにイギリスにおける社会主義運動にかかっているのである。結局、ヒルファディングは、ボリシェヴィキが資本主義の方に後退するか没落の運命にあると結論した。⁽³⁰⁾

したがって、1921年にロシアで新経済政策（ネップ）が導入されたとき、ヒルファディングがそれを資本主義の復活ととらえたのは当然のことだった。ネップについて彼はつぎのように評している。

ロシアにおいて我々がつねにのべてきたことが現われた。すなわち、いかなる国でも従来のマルクス主義歴史理論の法則からまぬがれえず、レーニンじしん資本主義の再建にとりかかることを余儀なくされたのである。マルクス主義歴史観のこの確証は、経済学的に考察することに慣れたものには、少しも失望をもたらすものではない。おそらくはボリシェヴィキ独裁の政治的成果によって鼓舞され、革命的情熱にかられて不可能事を信じ、そしてロシアで社会主義が実現されたと思っていた広範な大衆にとってもそうだろう。⁽³¹⁾

かくしてヒルファディングはネップの導入をロシアにおける資本主義復活への道と理解したが、これは当時西欧で広く受けいられていた認識であったといえる。たとえば、オットー・バウアーは、「ネップの現実的実践が資本主義経済の再建で」あり、マルクスの歴史観に反する経済的幻想と適時に訣別したのはソビエト政府の偉大な功績であるとのべている。⁽³²⁾ ネップの導入以後、ヒルファディングはロシアをもはや社会主義的に発展しつつある国とみなさなかった。1924年のある報告のなかで、彼は、戦争と革命によってはロシアを含めて資本主義が根絶されなかったのであり、世界の運命はボリシ

エヴィキの自己過大評価にもかかわらず、東ではなく西欧における発展によって決定されることを強調したのである。⁽³³⁾

以上、われわれは、ロシア革命にかんするヒルファディングの言及を整理してきた。この時期における彼の関心はむしろドイツ革命運動を指導することにあり、この指導に必要なかぎりでは、彼はロシア革命に論及するにとどまった。とはいえロシア革命の評価は、ドイツ革命運動を方向づけるにあたって大きな意味をもっていた。当時ヒルファディングは、ロシア革命とボリシェヴィキの方法の模倣を試みる革命運動の左翼と熾烈な思想闘争を強いられていたのであった。彼は、他の西欧社会主義者たちとともに、一面では、社会主義への移行が資本主義の内部での経済的諸条件の十分な成熟を前提としていると考え、ロシアにおける社会主義の見とおしを否定的にとらえた。そして他面では、ロシアとドイツにおいては社会変革の条件が異なることを強調し、先進工業国型の社会変革を志向したのであった。コミンテルン加盟問題をめぐる党内論争において、彼は党内左翼にむかって、レーニンじしん社会主義への道の多様性を正当に指摘していたことに注意をうながし、「ドイツの社会主義は経済的後進国の要求にそって方向づけられた戦術を追求することによって損われる」と警告した。⁽³⁴⁾ 彼は、一方で、われわれはロシア革命の経験から学ばなければならないと語っている。しかしロシアの経験の多くは彼にあって反面教師的な意味をもっていたようである。ドイツ革命を指導するうえでの教訓として、ロシア革命からヒルファディングが学んだのは、おそらくつぎのことであったと思われる。

①協議会独裁の樹立と社会主義への性急な試みは、テロルと内戦を生み、生産のおそろしい破壊をもたらすということを示した。^{*}

②「ロシア社会主義」を後進国に生じた社会主義の一変種（「専制的社会主義」）にとらえ、そこにおける混乱した体験から、彼は発達した工業国における社会主義が民主主義と不可分であり、その実現のためには綿密な計画的作業が必要であるということをいっそう認識した。

* 1919年9月のある報告のなかで、ヒルファディングはつぎのようにのべている。

「我々はなによりも、レーニンが発展の必然性だと繰り返して言明してきたテロリズムの義務を負いたくない。内戦は生産の中絶を意味し、まったく粗野な防衛社会主義(Verteidigungssozialismus)をもたらし、そして結局社会化を不可能にするのである」⁽³⁵⁾と。

- (3) K. Kautsky, Die Aussicht der russischen Revolution, in: Die Neue Zeit, 35. Jg., Bd. 2, 1917, S. 9. なお、カウツキーのロシア革命観については、山本佐門「二つの大戦の間の カール・カウツキー—そのボリシェヴィズム・ファンズム 観を中心」(『北大法学論集』29 (3・4) 1979・3)を参照。
- (4) Julius Braunthal, Otto Bauer—Ein Lebensbild, in: Otto Bauer. Eine Auswahl aus seinem Lebenswerk, Wien 1961. S. 27.
- (5) Otto Bauer [Heinrich Weber], Die Russische Revolution und das europäische Proletariat, 1917, in: Werkausgabe, Bd. 2, Europaverlag, S. 83. なお、オットー・バウアーのソビエト・ロシア論については、酒井晨史「ソビエト・ロシアとオットー・バウアー」(『経済研究』25 (1) 1974)を参照。
- (6) K. Kautsky, a. a. O., S. 11~13.
- (7) Otto Bauer, a. a. O., S. 71~72.
- (8) K. Kautsky, Die Diktatur des Proletariats, Wien 1918, Demokratie oder Diktatur, Berlin 1918.
- (9) K. Kautsky, Die Diktatur des Proletariats, S. 43.
- (10) K. カウツキー『自伝』玉野井芳郎訳, 世界大思想全集 14 巻, 河出書房 1955 年, 296 ページ。
- (11) Otto Bauer [Heinrich Weber], Die Bolschewiki und wir, in: Der Kampf, 11. Jg., 1918, S. 145~148.
- (12) たとえば, Otto Bauer, Bolschewismus oder Sozialdemokratie? Wien 1920, in: Werkausgabe, Bd. 2, S. 254f, S. 293f.
- (13) ローザ・ルクセンブルク『ロシア革命論』選集 4, 現代思潮社, 288 ページ。なお、ローザのロシア革命論については、西川正雄「ローザ・ルクセンブルクとドイツ政治」(『史学雑誌』69 (2) 1960)を参照。
- (14) 倉田稔「ヒルファディン(1915—1918)—ハプスブルク帝国の第一次世界戦争時代—」(『人文研究』(56) 1978・12), 167 ページ。
- (15) R. Hilferding, Revolutionäres Vertrauen!, in: Die Freiheit, 1. Jg., Nr. 6, 18. 11. 1918, MA.
- (16) 本稿の 299, 301 ページを参照。
- (17) R. Hilferding, Selbstverwaltung in der Industrie, in: Der Sozialist, 7. J., 1921, S. 1034.
- (18) R. Hilferding, Internationale, Referat auf der außerordentlichen Parteitag

- der U. S. P. D. in Leipzig, vom 30. 11. bis 6. 12. 1919, in: Protokolle der U. S. P. D., Bd. 2, 1919—1920, Verlag Detlev Auvermann KG., 1976, S. 315.
- (19) R. Hilferding, Gegen der Moskauer Diktat! (Rede) Leipzig 1920, 熊谷—男訳「モスクワの独裁に抗す」(『経営論集』17 (1) 1969. 9) 74—75 ページ。筆者は原文に目をとおすことができなかった。
- (20) R. Hilferding, Revolutionäre Politik oder Machtillusionen?, Hilferdings Rede gegen Sinowjew auf dem Parteitag in Halle 1929, Berlin, S. 20—21.
- (21) R. Hilferding, Gegen der Morkauer Diktat!, 熊谷訳, 75 ページ。
- (22) R. Hilferding, Die Sozialisierung und die Machtverhältnisse der Klassen, (Referat auf dem Betriebsrätekongreß, gehalten am 5. 10. 1920) Berlin, S. 16.
- (23) たとえば, K. Kautsky, *Die Diktatur des Proletariats*, 9-a.
- (24) ローザ・ルクセンブルク『ロシア革命論』(前掲) 237—238 ページ。
- (25) Otto Bauer, *Bolschewismus oder Sozialdemokratie*?, a. a. O., S. 254f.
- (26) R. Hilferding, Internationale, a. a. O., S. 315—316, S. 321.
- (27) R. Hilferding, Die Frage der Internationale, Referat auf der Generalversammlung der Bezirksorganisation Berlin-Stadt (U. S. P. D.), am 28. 9. 1919, in: Die Freiheit, 2. Jg., Nr. 471, 29. 9. 1919, MA.
- (28) R. Hilferding, Die Internationale, Referat auf der Reichskonferenz der U. S. P. D. am 9. und 10. Sept. 1919 im Abgeordnetenhaus zu Berlin, in: Protokolle der U. S. P. D., Bd. 1, 1917—1919, Verlag Detlev Auvermann G., 1975. S. 19.
- (29) Otto Bauer, *Weltrevolution*, in: Werkausgabe, Bd. 2, S. 182.
- (30) R. Hilferding, Internationale, a. a. O., S. 312, S. 321.
- (31) R. Hilferding, Die Einigung der deutschen Arbeiterklasse, in: Der Kampf, 14. Jg., 1921, S. 268.
- (32) Otto Bauer, *Der "neue Kurs" in Sowjetrußland*, Wien 1921, in: Werkausgabe, Bd. 2, S. 455, S. 431.
- (33) R. Hilferding, Die Reichstagswahlen und die Sozialdemokratie, Rede auf dem Berliner Parteitag der S. P. D., 1924, in: Protokoll., S. 165.
- (34) R. Hilferding, Internationale, a. a. O., S. 321.
- (35) R. Hilferding, Die Internationale, a. a. O., S. 20.

I 社会化の取組

(一)

「ドイツの労働者と兵士たちは好調な滑り出しにおいて政治権力を獲得し、しっかりとそれを握っている。今は完全な民主主義と生産手段の社会化（Vergesellschaftung）というプロレタリアの目標を実現するためにそれを維持し、使用するときである。」⁽³⁶⁾

と、1918年11月18日付の『フライハイ特』紙の論説を、ヒルファディングはこう書きはじめている。1918年11月9日、ベルリンで革命が勃発し、翌10日に開かれたベルリン労兵協議会の総会において、多数派社会民主党（SPD）と独立社会民主党（USPD）からなる人民代表委員政府が成立した。この人民代表委員政府をヒルファディングは「社会主義政府」ととらえ、この政府のもとで彼の社会化構想を打ち出したのであった。

しかし、人民代表委員政府を支配したのは、事実上エーベルトやシャイデマンら多数派社会主義者であった。ハーゼら USPD の人民代表委員が社会化の着手など革命の続行を訴えたのにたいして、彼らは当時のドイツにおいて社会主義を実現する意図をほとんどもっていなかった。エーベルトらはむしろ人民代表委員政府を国民議会の招集までの過渡的政府とみなし、その任務を①国民議会の招集の準備②国民の食糧の確保③講和締結などに限定しようとした。かくして人民代表委員政府は、客観的には、ロシア革命とボリシェヴィズムのドイツへの浸透を阻止し、資本主義体制の枠内で民主主義的諸改革をおこなうという役割をはたしたのであった。

ヒルファディングがかかる人民代表委員政府を「社会主義政府」とみなしたおもな理由は、革命における指導者の役割についての彼特有の理解にあった。彼は多数派社会主義者にたいする不信の声に答えて、つぎのようにのべている。

「我々はマルクス主義的に考え、諸関係の決定的な強制を考慮するのであり、人物の性格の善し悪しについては考えない。多数派社会主義者は革命の直前まで革命行動に反対した。直後にそれは革命行動に加わった。なぜか？ プロレタリア大衆がそれを強要

したからである……そうだ、そのとき（プロレタリアートが権力の絶頂にたったとき—引用者）になにか労働者代表がその社会主義的義務をあえて放棄しようと、実際に⁽³⁷⁾それが思いこむことができようか？ 一般にそのような意図が起こりえようか？」

つまり、ヒルファディングは、多数派社会主義者が革命の直前まで革命行動に反対したにもかかわらず、革命がいったん生ずると、客観状況に強要されて、彼らがプロレタリアートを裏切ることにはありえないと考えた。第一次大戦前、大戦中、彼は修正主義者や右翼日和見主義者の発生基盤を、労働者階級じしんのなかにある体制順応傾向、改良主義的雰囲気にもとめた。彼は、労働者が革命化するにともない、修正主義や日和見主義も消滅するとのべていた。⁽³⁸⁾今や彼は似たような理由、すなわち個人の役割が客観的情勢によって規定されるという考えから、多数派社会主義者にたいする「革命的信頼」をプロレタリアートに説いたのである。とはいえ、革命の経過につれて、ヒルファディングは多数派社会主義者にたいする不信の念をしだいに募らせざるをえなかった。たとえば1918年11月23日の『フライハイ特』紙上の論説のなかで、彼はすでにつぎのようにのべている。

「いわゆる多数派社会主義者のジャーナリズム代表の一部の態度がわれわれをますます不安で満たしている……我々は、社会主義の任務と義務が今革命を続行し、社会主義的諸原則を実現することであるという洞察が失われているのに気づく。我々は4年間のきびしい戦争時におけるのと同様に彼らがブルジョア諸政党と結託しているのを目にする。彼らは選挙・選挙・選挙以外のなにものも見ようとはしない、⁽³⁹⁾彼らには選挙民リストの作成以外には社会主義政府に仕事がないように思われるのだ。」

このようにヒルファディングは、人民代表委員政府の権力行使にかんする多数派社会主義者の態度に不信の念をもらしている。しかし、彼が多数派社会主義者の代表たちと完全に訣別したのは、後述のごとく1919年のベルリン「1月闘争」を契機にしてであった。

さて、ヒルファディングは、労働兵^{レニテ}協議会を権力基盤としたかかる人民代表委員政府を、国民議会が招集されるまでの臨時革命政府とみなしていた。彼はつぎのような理由から国民議会の招集が不可避であり、必要だと考えたといえる。

①時間的に無制限な協議会^{レニテ}独裁は、労働者階級以外の他の諸層を「政治的

共同決定」から排除し、その結果としてテロルと内戦を必然的にともなう。かかる内戦は戦後経済再建を不可能にするから避けねばならない。

②戦前からドイツ労働運動はずっと民主主義の獲得を目標にして闘争してきた。民主主義からの離反は労働者階級の分裂と我々の力の減退をもたらすだろう。

③ドイツでは工業プロレタリアートが国民の多数をしめるのであり、支配階級の権力の破局的崩壊後の歴史的状況下で選挙戦に打ち負かされるとは考えられない。

④「ドイツは今日無防備であり、武器をもたない。無制限な独裁の宣言は、他の世界の帝国主義者にとって革命的ドイツに襲いかかるシグナルにすぎないだろう。」

⑤(多数派社会主義者による)国民議会の招集を妨げるには USPD の力は弱い。⁽⁴⁰⁾

序章でのべたごとく、協議会独裁か国民議会の招集か、という問題がドイツ革命運動の主要な争点となっていた。ヒルファディングは協議会独裁を「ロシア革命の方式」とみなし、如上の理由からドイツにはふさわしくないと考え、民主主義を体现するものとして国民議会の招集に賛成したのである。

とはいえ、ヒルファディングはただちに国民議会の招集することには反対した。彼をはじめとして USPD は、革命の地盤がかためられるまで国民議会の招集を延期すべきだと主張し、早期招集を唱える SPD とこの点で対立していた。ヒルファディングは、人民代表委員政府の性格と任務についてつぎのようにのべている。

「……国民議会の賛成することは、拱手傍観することを意味するのではない。反対だが、最善をつくすということが、今日のスローガンである。プロレタリアートの独裁とその使用は過渡段階において最高度の必然性をもっている。⁽⁴¹⁾」

すなわち、ヒルファディングは労兵協議会権力を基礎とした人民代表委員政府をプロレタリアートの独裁の政府と解し、^{*}革命の政治的経済的基盤をか

ため、国民議会選挙におけるプロレタリアートの勝利を確実ならしむる、と
いった任務の遂行をそれに期待したのである。

* ヒルファディングは最初、プロレタリアートの独裁を国民議会が招集されるまでの比較的短期間に終わる過渡的政治形態だと考えていたといえる。しかし、数日後、彼は、国民議会もプロレタリアートの独裁の一形態であり、国民議会の招集がプロレタリアートの独裁を放棄するものではないと、つぎのようにのべている（同じ時期カウツキーも同様の見解を唱えている）。すなわち、「その場合、⁽⁴²⁾協議会によって行使されるプロレタリアートの独裁の一形態が、確固とした、国民投票によって実証された別の形態に置き換えられるだろう。国民の多数とその代表を背後にもった社会主義政府、それがプロレタリアートの独裁でないとすれば何か？」と。つまり、ヒルファディングは、プロレタリアートの独裁が民主主義と矛盾せず、プロレタリアートの政治支配（階級支配）ほどの意味をもつといった理解をも示したのである。彼は戦前のある論文のなかで、プロレタリアートが議会を征服し、それをプロレタリア独裁の道具に転化すべきことをのべている。⁽⁴³⁾したがって、プロレタリアートの独裁を労働者階級の政治支配とみる方が、彼ほんらいの考えに近いのではなからうか？ とはいえ、1920年のある報告において、彼はふたたびプロレタリアートの独裁を、民主主義とは対立的でかつ比較的短期間の、社会主義的民主主義への一過渡的段階としてとらえている。⁽⁴⁴⁾なお付言すれば、1926年のオーストリア社会民主労働党リッツ大会での綱領報告において、オットー・バウアーは、マルクス・エンゲルスのプロレタリア独裁概念を簡単に検討しつつ、それが元来プロレタリアートの階級支配を意味するにすぎなかったが、ロシア革命とボリシェヴィズムの影響によって、⁽⁴⁵⁾（議会制）民主主義と対立する概念だと理解されるようになったとのべている。

ヒルファディングは、プロレタリアートの独裁の任務としてまず、地方行政の自治の確立と新しい選挙の実施によって、なお残存している旧支配層の政治的権力基盤を奪取すべきだと唱えた。だが、旧官僚機構については、権力政策の観点からその行政機構をプロレタリアートの掌中にしなければならぬと指摘しながらも、官僚装置の具体的な改革策を提起せず、むしろ「技術的行政」(technische Verwaltung) の必要から旧官僚との協力が不可欠だと⁽⁴⁶⁾のべたのである。

人民代表委員政府の任務としてさらに社会化の着手の問題が注目される。この問題をめぐる一部の多数派社会主義者の態度にたいして、ヒルファディングはつぎのような批判的見解をもっていたといえる（1918年11月19日付

の『フライハイ特』紙の論説による。無署名だがヒルファディンクが書いたか、あるいは少なくとも彼の見解を表明している)。

彼らは、全力投入が必要なときに、社会主義政府の行動を国民議会の招集の準備に限定しようとしているようだ。社会主義的ドイツ・プロレタリアートは、総動員の解除、国民の食糧確保、講和の締結のために働き、それから、つぎになすべきことを国民議会にゆだねるために政治権力を獲得したのではない。政府は、「民主主義の確保と社会化の開始」に必要なすべてのことをただちになさなければならない。「政府は行動しえ、行動しなければならない。政府は、その行為が我々のもっとも強力なプロパガンダになるゆえに、行動しなければならない。我々は権力を獲得して、我々が約束したもの、すなわち人民大衆の政治的・経済的解放を実行するということを示さなければならない、示しうる……革命の続行ほど国民議会の招集を確定ならしむるものはない。」⁽⁴⁷⁾

ヒルファディンクはこうして右翼社会主義者の国民議会の早期招集のキャンペーンを批判し、政府にただちに社会化のための行動に着手するように訴えたといえよう。社会化について彼は別のところでつぎのようにのべている。

「一連の重要な社会主義的過渡的諸方策の実施がただちに可能である……我々は、そのような行動が綿密なプランにもとづきおこなわれ、生産を無秩序におとしいれないものでなければならないことを知っている。しかしこのプランはできるだけ迅速に作成されなければならない、その実施は猶予を許さない。政府は宣伝力をもち革命を前進させるところの民主主義的社会主義的行動綱領を提出しなければならない。われわれの行為が今や宣伝でなければならない。」⁽⁴⁸⁾

すなわち、ヒルファディンクは、政府に「民主主義的社會主義的行動綱領」の作成とその即時実施を要求したのである。この「行動綱領」を作成するうえでの指針として、彼はつぎのような見解を示している。

社会化に成熟した生産部門が確認されなければならない。原料産業がこれに属する。⁽⁴⁹⁾「大工業独占を共同所有に引き渡す可能性について、専門家のあいだで疑問の余地がない。もっとも重要な原料にかんする支配権を社会主義

政府の掌中に移すことは、ブルジョアジーとプロレタリアートのあいだの経済的権力配置 (Machtverteilung) にとって重要な意味をもっている。」(前掲の無署名論説による) したがって「経済的支配権力の大きな部分を我々にあたえるような社会化」(50) として「原料産業の社会化 (Vergesellschaftung)」を実施しなければならない。結局、政府がその作業の続行のために、意のままになる手段を必要とするだけ、社会化諸方策が要求されねばならない。(51)

以上、ヒルファディングは、社会化の指針として、社会化の対象となる産業部門と社会化における経済的権力の問題に言及している。結論的にいえば、彼は革命の初期に、人民代表委員政府の任務として、①社会主義を宣伝し人民を啓蒙するために、②資本家階級の経済的権力を奪い、「社会主義政權」の権力基盤を強化するために、社会化の作業計画の即時作成と社会化に成熟した産業の即時社会化を提唱した。彼は、国民議会の招集のまえに、「社会主義的過渡的政策」として社会化に着手すべきだと主張した。そして社会化の慎重かつ計画的な実施を準備する機関として社会化委員会の設置を要求したのである。

社会化委員会は、1918年11月21日、社会化の実施をもとめる労働者階級の声が高まるなか、USPDの人民代表委員ハーゼの要望によって発足した。委員長にカウツキーが就任し、ヒルファディングも『フライハイ特』紙編集長の肩書で委員会に参加した。ヒルファディングら USPDの指導者は、社会化委員会の招聘を、社会化の即時開始のための第一歩とみなした。しかし、人民代表委員政府を支配したエーベルトら SPDの指導者は、社会化をただちに実施する意図をもたなかった。彼らは政治的配慮から社会化委員会を設置したのであり、それによって労働者階級の不満を和らげ、革命のエネルギーを吸収しようとしたのであった。このように社会化委員会は、政府を構成する SPD と USPD のそれぞれの思惑を担いつつ発足したが、ともかくも12月9日に会議を開き、11日にこの会議の決定にもとづき「作業計画」(52) (Arbeitsplan) を発表して、その活動を開始したのであった。

(⇒)

12月16日からベルリンで、ドイツ革命運動にとって重要な意味をもった第一回全国労兵協議会大会が開催された。この大会は、①国民議会招集②軍事問題③社会化を主要議題としたが、社会化委員会⁽⁵³⁾の「作業計画」にそって「経済生活の社会化」にかんする主報告をなしたのは(12月20日)、ヒルファディングであった。ヒルファディングじしんのいうところによれば、2、3日前に彼の報告がおそらくおこなわれまいだろうと告げられていた^{*(54)}ので、彼は十分に報告の準備をすることができなかった。しかし報告そのものは、社会化のほとんどの論点を論じた体系的なもので、大会の雰囲気を捉え、嵐のような喝采を浴びたのであった。われわれは、以下、重要な論点に的をしぼって、ヒルファディングの報告を検討することにしたい。

* SPD 指導者は社会化決議を避けるために、「経済生活の社会化」を議題からはずすことを画策した。彼らは、12月16日まず大会の議事日程の3番目に予定されていた「経済生活の社会化」をあとの方に移し、それから12月19日時間切れでもってそれを議題からはずすことを提案したが、大会はこの動議をしりぞけた。⁽⁵⁵⁾

(1) ヒルファディングは、戦争による経済の混乱と荒廃に労働者階級の注意をうながすことから、彼の報告をはじめている。

「深刻かつ悲劇的な運命は、継承せねばならない相続遺産が荒廃させられ廃虚にされたときに我々が権力を獲得したことである……ドイツのように出血しつくし、原料をこと欠き、その生産を徹底的に廃虚にされ、労働者層が栄養不良で弱められ、戦争によって不具にされた経済を我々が引き受けなければならぬといった事情、この事情は社会化の任務をはなはだしく困難にしている……このことはむろん、我々の任務が解決しえなくなっていることを意味するのではない。が、それはおそらくそれを遂行するために要する時間が長びかされることを意味している……生産装置が荒廃し、原料をこと欠いた経済にかかわっていることをはっきりさせれば、我々の第一の任務がこの経済をふたたび稼働させることにあるのは確かだ。」(傍点一引用者)⁽⁵⁶⁾

こうしてヒルファディングは、社会化の実施が慎重になされなければならないと労働者階級に説くのである。社会化問題においてヒルファディングの思考に大きな比重を占めたのは、戦後経済再建の課題であり、彼は社会化をつ

ねに戦後経済再建の任務とからめて考えていた。たとえば、彼は別の報告で、社会化による計画的合理的な生産が戦後経済再建の最良の道であると主張したり、あるいは経済再建の必要からも生産力の上昇を社会化の前提条件として設定したのである。⁽⁵⁷⁾ここでは彼は、ルール地方の鉱山労働者のストライキ運動などを念頭におき、⁽⁵⁸⁾第一に、革命運動を賃金運動に解消してはならないこと、第二に、社会化の着手を無政府的におこなってはならないことを労働者に説得しようとした。彼は、また、この報告にあたって、おそらくはスバルタクス派による「下からの社会化」要求やソビエト・ロシアにおける労働者統制運動の経験を念頭においていた。彼は、労働者層の直接行動による個別的社会化の試みに反対してつぎのようにのべている。

今日ただちに個々の経営を労働者層に引き渡すことができ、これがあたかも社会化であるかのようにいわれている。これは過去に破産した生産協同組合 (Produktivassoziation) の理念である。しかし、労働者層による経営の引き受けは、社会化を意味せず、資本主義社会の性格を変えるものではない。それは資本主義的生産様式の無政府性を存続させ、個々の経営条件の優劣にしたがい、労働者間の大きな不平等をもたらすだろう。社会化は労働者層への経営の譲渡を意味するのではなく、全生産がしだいに共同体の処理権 (Verfügungsgewalt) のもとに移ることを意味している。⁽⁵⁹⁾

ヒルファディングはかくて労働者層による社会化への直接行動を抑制し、政府による上からの社会化行動を提唱したのであった。彼は、また、社会化などをもとめて労働者層がおこなうストライキ運動や街頭行動がかえって混乱し荒廃した戦後経済に打撃をあたえるにすぎないと考え、上からの社会化を約束することによって労働者の経営への復帰をうながし、彼らをふたたび生産につかせようとした。彼が労働者階級の第一の任務として強調したのは、生産の再開であった。^{*}この生産再開の観点は、社会化の対象となる生産部門の選定と社会化における経済的権力の問題をのべるにあたって大きな影響をあたえたといえる。

* ヒルファディングの報告に続く討論のなかでデュッセルドルフ出身の代議員ベルテ

ン Berten が、生産の再開を強調するヒルファディングに異議を唱えている。ベルテンは、社会化委員フーエ Hue やカウツキーが社会化の即時実施を否定しているとのべ、まず生産の再開、それから社会化、と訴えるヒルファディングの発言が、結局論点⁽⁶⁰⁾をばかしつつ彼らと同様に社会化の即時実施を拒否したものだとして批判したのである。

(2) ヒルファディングは、『金融資本論』(1910年)において、金融資本をなすベルリンの6大銀行と基幹産業の掌握によって全生産を支配し、そのもとで社会主義に漸次的に移行する見とおしについて語った。彼によれば、経済の管制高地を握るだけでさしあたって十分なのであり、多数にのぼる農民経営と工業的小経営まで収奪する必要はなかった。⁽⁶¹⁾このようにヒルファディングは部分社会化論を唱えたが、「経済生活の社会化」報告では、『金融資本論』におけるこの部分社会化のプログラムを、さらに社会化の対象をせばめる方向で修正したのであった。この点、少し立ちいって検討したい。

*『金融資本論』では、「社会化」(Vergesellschaftung)概念が、「①資本主義的社会化」⑤社会主義化の二通りの意味において使用されている。

ヒルファディングは社会化を開始するにあたって重要な二つの観点について語っている。ひとつは、どの産業部門が社会化に熟しているかである。①大量生産の産業部門②技術的経済的集積がすみ私的独占によって支配されている諸部門③大きな経済的意味をもつ使用価値種類を生産する部門—これらが社会化に熟した産業部門である。具体的には鉄・炭鉱業、第一次鉄加工業およびカリ鉱業その他の領域がこれに該当している。

社会化にあたってもうひとつの重要な観点は経済的権力の問題である。これは二つの意味をもっている。第一に、アメリカ資本主義における鉄道の支配に、ドイツ資本主義では石炭と鉄の支配が相当する。「もしも……石炭と鉄にかんする社会の支配権を手中にするならば、我々はドイツ資本主義からそのもっとも重要な経済的権力地位を奪い、かくて産業の一大部分にかんする支配権力を掌握するだろう。」第二に、ドイツの大銀行は産業資本と密接に結合しており、それゆえ鉄・炭鉱業と重工業の社会化は銀行の権力基盤を揺がすのである。⁽⁶²⁾

このようにヒルファディングは、いわば社会化における「経済成熟視点」と「権力政策的観点」を示している。ここで彼はやはり重要産業の社会化による全生産の支配といった、『金融資本論』におけるのと同じような見解を唱えている。しかしわれわれは内容の点で大きな変更がなされていることに注意しなければならない。そしてこの変更は前述の戦後経済再建の課題との関連で生じたといわなければならない。

ヒルファディングは戦後経済再建の課題を社会化の前提的な条件にすることによって、社会化の対象となる産業部門の範囲をいっそうせまめることになった。彼は、生産の再開の配慮から、農民経営（食糧供給の必要）と輸出産業（外国貿易を再開し外国から原料を購入する必要）を社会化の対象から除外した。⁽⁶³⁾ 社会化の「権力政策的観点」からより重要なのは、大銀行を社会化の対象からはずしたことだった。

ヒルファディングは、ロシアでは社会主義の実験が大銀行の社会化からはじめられたことを指摘している。この実験は、産業にたいする銀行の権力が非常に大きく、銀行を社会化すれば全産業にかんする支配権を一撃でえることができるといった考えからなされた。これについてヒルファディングはつぎのようにのべている。

「この点、まさに私が『金融資本論』でおこなった説明が引き合いに出されている。理念は非常に近似的なものであり、もしも我々が経済を繁栄状態のなかで引き受けたとすれば、この道は適切なものだったといえよう。しかし今は産業の再開のために—そして我々は一撃で全産業を社会主義的に組織しえない—銀行が供与する信用を必要とするといった状態だ。信用の問題は非常にむずかしく、また産業の流通資本（*umlaufendes Kapital*）の一大部分が戦債に固定され保留されることによっていっそう複雑化されている。^き その結果銀行の活動はここでは不可欠であり、我々は社会化を銀行業から開始することはできず、直接的に生産のもとではじめなければならないだろう。最終結果は依然として同じである。⁽⁶⁴⁾」

ヒルファディングはこうして大銀行の即時社会化を否定し、大銀行を社会化せずとも、一連の重要産業の社会化が成就されるとすれば、銀行による産業支配の基盤を動揺させることができると指摘した。その場合、彼は、銀行に残された活動分野で重要なのは非社会化諸産業にたいする流通信用の保証

であり、まさにこの機能遂行のために銀行を過渡期には欠きがないという考えを示している。

* オットー・パウアーはオーストリアの特殊事情を考慮しつつ銀行の社会化問題についてつぎのようにのべている。すなわち、戦争によって銀行の役割が根本的に変化し、銀行は、戦争目的のための国家の信用調達機関となり、その産業への影響力はいちじるしく後退した。外国信用との関係上銀行の社会化の実施は容易でない。そのためまず戦争業務を清算させ、通常業務に復帰させて、そのうえで社会化の頂点をなすものとして銀行を社会化するのが最善の策だろう。⁽⁶⁵⁾

銀行を社会化の対象から除外したヒルファディングにたいして、大会出席者のあいだから当然クレームがついた。ハレ出身の代議員ケネン Koenen は、金融資本がすべての資本の中央部であり、ドイツ資本主義の脊髄であるという理由をあげて、銀行の社会化の着手を訴えた。「石炭と鉄から資本に接近し、資本の影響力を打ちくだこうとするならば、それは廻り道である。直接的な道は、ヒルファディングが『金融資本論』でのべたように、金融資本の司令部に直接に踏みこむことである。」ケネンによればまた、大銀行は国家に後見されるとすればはるかに効果的に信用を保証しようというのである。⁽⁶⁶⁾

ケネンのこうした批判にヒルファディングは「結語」(Schlußwort)でつぎのように答えている。大銀行の社会化からはじめなくても、重工業の社会化は「大銀行から経済上の支配地位を奪う」ことができる。というのは、「銀行のこの経済上の支配地位は、流通分野というよりむしろ重工業、原料独占工業との結合にもとづいている」からである。証券市場においても同様である。もしも我々が社会化に熟した産業を社会化すれば、株式資本の非常に大きな部分、市場に存在する株式の多くが脱落し、大銀行の力はこの分野でも減退するのである。大銀行に残されたのは信用市場におけるその役割であり、これは現時点でいちじるしく重要であるが、権力問題においては危険ではない。また、銀行の統制問題についていうと、大銀行を社会化の対象から除外するといってもそれを無統制のまま放置するのではない。信用市場の統

制のためにはライヒスバンクが重要な道具になるのであり、ライヒスバンクの信用政策が社会化に役だてられなければならない。⁽⁶⁷⁾

このように「結語」においてヒルファディングは、銀行の社会化問題にかんするケネンの批判に答えて、自説をより説得的に論拠づけようとした。しかし、いずれにせよ彼は金融資本と正面から対決することを避け、「最終結果は依然として同じだ」とことわりつつ「廻り道」を選んだのである。これは、「権力政策的観点」からすれば大幅な後退を意味した。こうして戦後経済再建の必要、生産の攪乱を避ける必要から、ヒルファディングは『金融資本論』における彼の見解を決定的に修正したが、つぎにみる「社会化の波及」論もこの関連でとらえられなければならない。

(3) オットー・バウアーは、「カール・カウツキーとボリシェヴィズム」(1919年10月)という論文で、ボリシェヴィズムと社会民主主義の相違点のひとつとして、ボリシェヴィキが一撃で社会主義を実現しようとしたのにたいして—バウアーは戦時共産主義を念頭においている—、社会民主主義は社会主義への漸次的長期的な移行を考えていることをあげた。⁽⁶⁸⁾ ヒルファディングも、おそらくはボリシェヴィズムを念頭において、政治的革命が比較的短期間の所業であるとすれば、経済的変革が非常に長期にわたる過程であること⁽⁶⁹⁾を強調している。社会変革が長期的過程であることはすでに『金融資本論』⁽⁷⁰⁾のなかでも指摘されていた。しかし我々はこの点でもひとつの変更がほどこされていることを看過できない。「経済生活の社会化」にかんする報告では、「社会化の波及」論ともいうべき視点が導入されているのである。この点、ヒルファディングはつぎのようにのべている。

「もしも我々がまずはじめたとすれば、はじめたものにおのずといつも新しいものがつけ加えられる。もし我々が鉄道を掌中にするならば、鉄道のために機関車を作り、また鉄道のためのレールを製造するだろう。もし我々が石炭と鉄を掌中にするならば、一定の加工業を編入しうだろう。もし我々がひとつの産業部門を掌中にするならば、おのずと他の産業部門がさらにそれに編入される。社会主義的生産のサイクルはたえず成長⁽⁷¹⁾する。」

ヒルファディングによれば、社会主義化は秩序だった組織的建設活動であ

り、革命を「無秩序な生産破壊の運動に解消すること」は許されない。生産を攪乱することのない、さらに戦後経済再建を目的とした社会化—こうした考えからヒルファディングは、上述の「社会化の波及」論を唱えた。彼は他方で「結語」において、「すべての社会化に成熟した産業、とくに鉱業の社会化」を即時開始することを提唱している。しかしこの場合すべての成熟産業が同時にして一挙に社会化されると考えてはならない。実際にはまず社会化委員会が綿密に研究調査したうえで、政府が炭鉱業の社会化に取り組み、それから他の産業を波及的に社会化していくプロセスが考えられていた。したがって『金融資本論』における構想とは異なり、経済の管制高地を掌握することじたいが成長的漸進的な性格をもたされていたのである。これは戦後経済再建のためにも経済を攪乱することなく社会化するといった慎重な配慮から生じた見解だといえる。こうした社会化の波及的プロセスを保障するために、ヒルファディングは生産手段の有償収用 (Entschädigung) という考えを展開している。収奪者の収奪というマルクスの言葉に触れつつ、彼はつぎのようにのべている。

「切実な経済的理由、経済の今の状態から、全生産を一撃で社会主義的に組織することができない、と私はすでにのべた。そうだとすれば、没収によっては一定の不平等が生ずるだろう。ある資本家は収奪され、他の資本家は私的に労働しつづけるだろう……単純な没収のもとではとうほうもない困難が生ずる。また、大所有がなんと⁽⁷²⁾かして没収を避けるためにその実際の所有を隠し、人為的に分散する可能性も生ずる。」

かくてヒルファディングは、「社会化を平等におこない、経済における混乱を避けるために」、社会化行為を①有償収用と②社会主義的租税立法 (財産課税等)による財産の不平等の解消といった二つの過程に分けるのである*。確かに、エンゲルスがいうように、生産手段を資本家から有償で没収できるならば、それは悪い方法ではない。しかし、我々は、ヒルファディングのこうした主張が、これまで検討した彼の諸見解とあいまって、内乱を回避しようと願うあまり、資本家に受けいれられやすいような配慮をほどこしたものであり、反独占闘争や階級闘争の視点をいちじるしく欠いているような印象を受けるのである。この点については後にたちかえるが、ここで結論をさき

どりしていえば、ヒルファディングの社会化構想は、多少労資協調主義的な性格をもち、平和的計画的な移行をめざした、社会主義への成長・転化をのべる性格をもっていたとみてよいだろう。

* ① 1919年6月30日に開催された第10回ドイツ労働組合大会での報告において、ヒルファディングはつぎのようにのべている。すなわち、有償収用の問題は少しも原則的な問題ではなく、たんなる合目的性の問題（Zweckmäßigkeitfrage）である。補償なしの社会化は、非社会化産業部門の資本家の恐怖と抵抗を生み出すことからとれない。この有償収用の問題は「社会主義的租税政策」と結びついていなければならぬ⁽⁷³⁾。それゆえ社会化は社会主義者による政治権力の掌握を必要としている。

② 1919年7月のある論説でヒルファディングは、「社会主義的租税政策」の目標が、資本主義期から引き継がれた財産、所得の差別を、社会主義社会においてある程度まで調整することにあるとのべている⁽⁷⁴⁾。

ヒルファディングの社会化報告は、約言すると、戦後経済再建、生産の再開の配慮から銀行を社会化の対象から除外するなど社会主義への取組に大きな制限を課したが、ともかくも、社会化に成熟した産業の即時社会化を唱え、当時の労働者階級の要求に答えたといえよう。全国労兵協議会大会はヒルファディングの報告にそって、「労働者協議会大会は、すべての社会化に熟した産業、とくに鉱業の社会化をためらうことなく開始することを政府に委任する」という決議を採択した*。この大会決議にもられたのはしたがってヒルファディングら USPD 指導部の社会化政策であったといえる。SPD の指導者たちは、社会化の着手には消極的な姿勢を示し、とくに社会化の即時実施には、戦後の経済荒廃などを理由にあげて強い疑念を表明していた。全国労兵協議会大会でも、前述のごとく彼らは社会化の即時実施を要求した決議を避けようとした。しかしヒルファディングによって説明された USPD 指導部の社会化政策は、大会代議員の気分を捉え、SPD 系の代議員の支持もえて、大会決議に結実していったのである。だが、ここにひとつの問題が提出された。ヒルファディングが提唱したのは政府と社会化委員会による上からの社会化であり、彼は協議会による労働者の直接的な社会化行動を拒絶した。大会決議も成熟産業の即時社会化を政府に委任した。ところで、社会化

を委任された政府はいかなる政府なのだろうか？ 政府ははたして社会化の即時実施を望んでいたのだろうか？

* 大会にはゲイヤー案とリューデマン＝ゼーヴェリング案の二つの決議案が提出された。ゲイヤー案は①鉱業の即時社会化を政府に委託すること②その実施まで最低賃金を法的に確立することなど、を提起した。リューデマン＝ゼーヴェリング案は、すべての社会化に成熟した産業部門のためらうことなき社会化を内容とした。ヒルファディングはゲイヤー案の②を重要かつ自明なこととして政府と社会化委員会に委ねること、そして①をリューデマン＝ゼーヴェリング案に融合して、「すべての社会化に熟した産業、とくに鉱業の社会化をためらうことなく……」⁽⁷⁵⁾とすることを提案した。大会は、彼が修正提案した決議を採択した。

(三)

ヒルファディングは、既述のごとく、革命の当初、人民代表委員政府による社会化綱領の作成と社会化の即時実施を訴えていた。我々は、この人民代表委員政府が社会化を実施するつもりがあるかどうか疑わしいことを指摘したが、今や情勢は社会化にさらに不利な方向に変化していた。第一回全国労兵協議会大会は、協議会独裁か国民議会の招集か、という問題にひとつの結着をつけ、第1回国民議会選挙の日どりを1919年1月19日と決めたのであった。これは国民議会選挙の早期実施をもとめていた SPD 指導部の政治的勝利であり、協議会独裁を唱えたスバルタクス派のみならず、国民議会選挙のできるだけの延期を主張した^{*} USPD 指導部の敗北をも意味したのである。

* たとえば、1918年11月30日付の『フライハイ特』紙は、全国労兵協議会大会にむけて、国民議会の招集は不可避だ⁽⁷⁶⁾と考えるが、一定の社会主義政策の必要な処置をこうじる猶予期間をおくべきだと主張していた。

ヒルファディングはすでに全国労兵協議会大会開催の前日の12月15日に開かれた USPD ベルリン地区臨時総会において、USPD が国民議会選挙を避けられないものとして受け入れ、最大可能な成果を確保すべきだ、という趣旨の提案をおこなった。つまりこの時点で彼は国民議会選挙の早期実施を

甘受すべきだと考えたのである。⁽⁷⁷⁾彼は、社会化報告においても、1月19日の国民議会選挙の実施を既成事実と受けとめて、社会化事業の前提として国民議会における社会主義的多数派の形成に全力をつくすことを大会出席者たちに訴えたのである。

「安んじて働きつづけるために、我々は社会主義政府が確固としたものであることを必要とする。そしてこれは、人民の多数が我々の背後にたつ場合にのみ実現される……我々はこの多数が獲得され、それから我々が遂行する作業が着実に前進し、急速に成就されるとかたく確信している。」⁽⁷⁸⁾

かくして社会化の運命は国民議会選挙にゆだねられることになり、人民代表委員政府による社会化の開始を唱えたヒルファディングの当初のプランも一定の変更をせまられざるをえなかった。つまり社会化委員会での準備作業の結果を待つとすれば、人民代表委員政府のもとでの社会化は事実上ほとんどむずかしくなったといえよう。^{*}

^{*} 1918年12月21日の『フライハイ特』紙の論説(S. N. 署名)は、国民議会選挙まであまりに期間が短かく、「行為」による強力なプロパガンダ、すなわち過渡的社会主義諸措置(成熟産業の社会化の着手)がほとんど可能でなくなったとのべている。⁽⁷⁹⁾

とはいえ、全国労兵協議会大会における社会化決議は、いつ社会化を実施するかについてあいまいな形に残していたのであり、この点、論議的となった。^{*}人民代表委員政府のなかでも、ルール炭鉱労働者にただちに行動をおこすと公約していたUSPD左派のバルト(USPDの他のふたりの人民代表委員もバルトを支持した)と社会化の即時実行の意図をもたず、全国労兵協議会の社会化決議を反古にしようとしていたSPDの人民代表委員たちとのあいだで、この点をめぐって対立が生じた。⁽⁸⁰⁾

^{*} たとえば、A. シュタインマン=ブッハー Steinmann-Bucher は、全国労兵協議会における社会化決議が無責任にも人民代表委員政府にただちに社会化を開始する義務をあたえたと批判的にのべた。⁽⁸¹⁾

一方、全国労兵協議会大会において社会化決議がなされたのと同じ日の12月20日、社会化委員会の本格的な作業が開始された。社会化委員会は炭鉱

業にかんする「科学的」調査研究をみずからの任務として設定し、この日の会議も炭鉱業における技術的諸問題を論題とした。ヒルファディングの発言もテクニカルな論点についてであり、社会化（社会主義化）の関心から、興味を引くものはなかった。ところが、翌 21 日の委員会の席上、社会化をめぐる前述の政府内における SPD と USPD の対立に直面したヒルファディングは、つぎのような提案をおこなった。すなわち、政治的情況を考慮して、鉱物資源と石炭商業の国による引き受けを要求すべきであり、そうすれば政府を苦境から救うことができる、と。というのは、政府は、第一に、社会化をただちに開始するといった全国労兵協議会大会の決議を守り、第二に、社会化委員会の決議（社会化案）を待つべきだからである。⁽⁸²⁾

ヒルファディングのこの提案は一種の応急処置—多少折衷的な響きをもつ—を意味してた。つまり彼は、政治的配慮からさしあたって鉱物資源などの社会的所有への移行のみをおこない、組織と管理の面での社会化の実施については社会化委員会の具体的な建設プランが作成されるのを待つべきだと主張したといえよう。しかし、ヒルファディングのこの提案は社会化委員会の受けいれるところとならなかった。それ以降委員会は炭鉱業のこまごまとした実情や技術的諸問題にかんする「科学的」検討をつづけた。そのなかでヒルファディングもかなりの発言をおこなったが、技術的諸問題にかんする発言が多く、社会化の関心から、社会化産業が官僚主義からのがれ営業能力をもつために、国家から独立した自主管理組織を形成すべきだという提案、さらに下部組織にも一定の自主管理を許容し、社会主義的競争を生み出すべきだという提案などがわずかに注目される。⁽⁸⁴⁾

社会化委員会の「科学的」調査・研究作業は、政治情勢が激変し、諸階級の力関係が推移するなかですすめられた。最初の不吉な前兆は、12月24日の人民海兵師団事件においてすでに示された。この事件は、政府による賃金支払いの遅滞に、革命派の影響下にあった人民海兵師団が抗議行動をおこしたことから生じた。こうした人民海兵師団の抗議行動にたいして、人民代表委員政府の SPD メンバーは、反革命的義勇軍を用いて攻撃させた。この事

件は、SPD 指導部の革命に臨む態度を赤裸々に示したのであり、ヒルファディングもつぎのように批判せざるをえなかった。

「我々はそこで社会主義的精神において活動がなされるかぎり、革命と社会主義の確保のために両社会主義政党の協力が必要だ⁽⁸⁵⁾と思うことを隠しだてはしない。しかしエーベルトと彼の友人の説明はこの精神と矛盾する。」

ヒルファディングが編集する『フライハイ特』紙は、ローザ・ルクセンブルクが酷評したように、SPD と USPD の新しい連合政権の形成の模索と結びついていたが⁽⁸⁶⁾エーベルトやシャイデマンらにたいするはげしい批難をおこないはじめた。この事件に抗議して、12月29日、ハーゼら USPD の人民代表委員は辞職した。この辞職とともに矛盾にみちた SPD と USPD の連合政権の時代⁽⁸⁷⁾—ハーゼによれば「革命の第一段階」—が終った。

(86) R. Hilferding, Revolutionäres Vertrauen!, in: Die Freiheit, 1. Jg., Nr. 6, 18.

11. 1918, MA. なお、『フライハイ特』紙におけるヒルファディングの見解については、黒滝正昭、前掲論文(註2)が詳しい。

(87) Ebenda.

(88) 拙稿「第一次大戦とヒルファディングの帝国主義論」(北大『経済学研究』26(3) 1976. 8) I の(2)を参照。

(89) R. Hilferding, Klarheit!, in: Die Freiheit, 1. Jg., Nr. 15, 23. 11. 1918, MA.

(90) R. Hilferding, Revolutionäres Vertrauen!, a. a. O.

(91) Ebenda.

(92) R. Hilferding, Klarheit!, a. a. O.

(93) 拙稿「第一次大戦前夜のヒルファディング—社会主義と帝国主義—」(北大『経済学研究』29(1) 1979. 3) 212 ページを参照。

(94) R. Hilferding, Revolutionäre Politik oder Machtillusionen? Rede gegen Sinowjew auf dem Parteitag der U. S. P. D. in Halle 1920, Berlin, S. 22~23.

(95) Otto Bauer, Programmrede auf dem Sozialdemokratischen Parteitag, abgehalten in Linz vom 30. 10. bis 3. 11. 1926, in: Protokoll., S. 269~271.

(96) R. Hilferding, Klarheit!, a. a. O.

(97) Der Beginn der Sozialisierung, in: Die Freiheit, 1. Jg., Nr. 8, 19. 11. 1918, MA

(98) R. Hilferding, Revolutionäres Vertrauen!, a. a. O.

(99) R. Hilferding, Klarheit!, a. a. O.

(100) Der Beginn der Sozialisierung, a. a. O.

(101) R. Hilferding, Klarheit!, a. a. O.

- 52 「作業計画」の内容については、有沢広己『インフレーションと社会化』日本評論社、1948年、134～135ページを参照。
- 53 第1回全国労兵協議会大会については、安世舟『ドイツ社会民主党史序説』御茶の水書房、1973、第3篇第2章第4節を参照。
- 54 Allgemeiner Kongreß der Arbeiter-und Soldatenräte Deutschlands, vom 16. bis 21. 12. 1918 im Abgeordnetenhaus zu Berlin, Stenographische Berichte, Eingeleitet von F. Helm und P. Schmitt-Egner, 1972, S. 171. ヒルファディングの報告を紹介したものとして、米川紀生「第1回全国労・兵協議会大会及び憲法定国民議会選挙の理解に寄せて」(新潟大学『経済学年報』(1) 1977. 2)がある。
- 55 Ebenda, S. 6, S. 152. David W. Morgan, *The Socialist Left and the German Revolution*, London, 1975, S. 191.
- 56 Allgemeiner Kongreß…… S. 156.
- 57 拙稿「ヒルファディングの『組織された資本主義』論」(3) (北大『経済学研究』28 (2) 1978. 6) 60～61ページを参照。
- 58 小野清美「ドイツ革命(1918～19年)における『社会化』運動の研究」(名古屋大学『法政論集』(79) 1979. 3) 79～87ページを参照。
- 59 Allgemeiner Kongreß……, S. 157.
- 60 Ebenda, S. 162.
- 61 R. Hilferding, *Das Finanzkapital*, 1910, Eingeleitet von Eduard März, 1973, Bd. 2, S. 503～504. 林要訳, 国民文庫版 (2) 336～337ページ。
- 62 Allgemeiner Kongreß……, S. 157.
- 63 Ebenda.
- 64 Ebenda, S. 158.
- 65 Otto Bauer, *Der Weg zum Sozialismus*, Wien 1919, S. 27.
- 66 Allgemeiner Kongreß……, S. 170.
- 67 Ebenda, S. 171.
- 68 Otto Bauer, Karl Kautsky und der Bolschewismus, in: *Der Kampf*, 12. Jg., 1919, S. 665.
- 69 Allgemeiner Kongreß……, S. 160.
- 70 R. Hilferding, *Das Finanzkapital*, Bd. 2. S. 504. 林訳 (2) 337ページ。
- 71 Allgemeiner Kongreß……, S. 160.
- 72 Ebenda, S. 158～159.
- 73 R. Hilferding, Zur Sozialisierungsfrage, Sonderabdruck aus dem Protokoll der Verhandlungen des 10. Deutschen Gewerkschaftskongresses, abgehalten in der Zeit von 30. 6. zu 5. 7. Nürnberg, Berlin 1919, S. 38. 米川紀生「研究

ノート> Rudolf Hilferding の社会化論に関する追加的一資料」(『新潟大学経済論集』(16) 1973/II) 93 ページ。

- 74) R. Hilferding, Sozialistische und bürgerliche Steuerpolitik, in: Die Freiheit, 2. Jg., Nr. 330, 14. 7. 1919, MA. なお、有償収用の問題については、岩城忠一「転形期の経済問題—独逸社会民主主義者の社会化論に関する一考察」(経済学全集 10 巻, 改造社, 1932) が詳しい。
- 75) Allgemeiner Kongreß……, S. 171.
- 76) In: Die Freiheit, 1. Jg., Nr. 28, 30. 11. 1918, MA.
- 77) J. P. ネットル『ローザ・ルクセンブルク』諫山正他訳, 河出書房新社, 1975 年, 下, 312~313 ページによる。
- 78) Allgemeiner Kongreß……, S. 160~161.
- 79) S. N., Das Ergebnis, in: Die Freiheit, 1. Jg., Nr. 67, 21. 12. 1918, MA.
- 80) David W. Morgan, *The Socialist Left*……, pp. 192~193.
- 81) Arnold Steinmann=Bucher, Sozialisierung?, 1919, S. 68~69.
- 82) Hans Schieck, Die Behandlung der Sozialisierungsfrage in den Monaten nach dem Staatsumsturz, in: *Vom Kaiserreich zur Weimarer Republik*, hrsg. Ederhard Kolb, Köln 1972, S. 149. 太田和宏「ドイツ革命期における石炭産業社会化問題」(上)(北海学園大学『経済論集』25 (3) 1978. 1) 70 ページ。
- 83) 社会化委員会(第一次)の公開会議におけるヒルファディングの発言はつぎのごとくである。Verhandlungen der Sozialisierungskommission über den Kohlenbergbau im Winter 1918/1919, Verlag H. R. Engelmann, 1921. S. 26, 28-29, 31, 35-6, 96, 99, 101, 125-166 (als der Vorsitz), 233-235, 245-246, 318, 339, 367.
- 84) Ebenda, S. 245~246.
- 85) R. Hilferding, Das Schuldbekenntnis, in: Die Freiheit, 1. Jg., Nr. 76, 27. 12. 1918, MA.
- 86) ローザ・ルクセンブルク「空中楼阁」選集 4, 178 ページ。
- 87) Hugo Haase, Die erste Phase der Revolution, in: Die Freiheit, 2. Jg., Nr. 1, 1. 1. 1919, MA.

(未完)